

高城玲 著

『秩序のミクロロジー  
—タイ農村における相互行為の民族誌』

神奈川大学出版会 2014年



自著を紹介するという事は想像以上に難しい。特に刊行直後の自著は客観的に対象化することが困難でもある。今回は時間的制約もあるとのことなので、編集側の求めに応じ、本書への導入としてその背景と意図を簡潔に紹介することとした。

本書は、社会の秩序を相互行為の過程というミクロな経験の地平から具体的にとらえ返すひとつの試みである。秩序のミクロロジーという視座から、タイ農村における行為の過程を文化人類学的な民族誌として記述したのが本書であると言えるだろう。

タイ農村において人々はいかに互いに行為し合い、日常生活を営んでいるのだろうか。また、そうした日常の相互行為は社会の秩序とどのように関係しているのだろうか。本書の始発には、こうした素朴な問いがあった。

1995年の調査開始から数えると膨大な時間が経過してしまったことに自身でも呆然としてしまうが、改めて振り返ってみると、こうした素朴な問いへといたる関心のきっかけが幾つか存在していたように思う。ここでは本書の背景となるきっかけのひとつを示しておきたい。

そのきっかけとは、タイ農村で長期のフィールドワークを始めるため、調査地にある教育大学の先生の紹介で、初めて調査村を訪れた時のことである。迎えてくれたのは郡の農業事務所の係員で、近隣村の村長を紹介してくれるという話になっており、しばらくしてやってきたのがある村長だった。その際の村長の些細な何気ない行為が、私の関心をおおいに引きつけたのである。

まず、目を引いたのが村長が手にしていたトランシーバーだった。当時はまだ携帯電話が普及しておらず、村には固定電話すら存在していなかった。そのため、当時の村長は行政的な連絡や緊急時に備えて、常にトランシーバーを携帯して歩いていた。この村長はトランシーバーで何かの連絡を取って大声でしゃべりながら、訪問した私たちの目の前に登場した。そして、迎えた農業事務所の係員が村長に丁寧な合掌の挨拶をしたのに対して、村長はわずかに顎を上を上げて応じた程度でその脇を通り過ぎ、そのままトランシーバーに応答しながら一番奥のベンチに向かっていったのである。まず、この登場の仕方が印象深かった。

ほかにもその場での村長の行為は、非常に特徴的に見えた。例えば、訪問者に水を差し出すよう命ずる指図も、傍らにいた数名の近隣村民らに水が入ったクーラーボックスを顎で指し示し、一言「水」と言うだけだった。ベンチに腰を下ろした後も、サンダルを脱いでその上にあぐらをかいて座り、すぐさま手で巻きたばこの準備を始め、係員の説明を聞き流しながら、あまり相手にもしていない様子であった。その一方で、教育大学の先生との対応では、ほかとは対照的な行為を見せていた。村長は先生と正面から向き合って、丁寧語を頻繁に用いながらこの場でひととき大きな声で応答し、その対応を独占していたのである。

この時の村長の一連の行為は、他の村民の行為とは全く違って私には見えた。トランシーバーという持っているモノのみならず、座り方、話し方、言葉遣い、身振り、声量という村長のあらゆる行為の細

部が他の村民とは際だって異なるものに見えたのである。それは、出会いにおける一見ささいなやりとりであり、それぞればらばらな個々人の行為にすぎないものである。しかし、それら一連の行為がこの場で村長を他の住民から差異化する過程となっていくことに、おぼろげながら気づき、圧倒された瞬間でもあった。

タイ語で村長はプー・ヤイ・バーンと言う。文字通りに訳せば、「村（家）の大きな人」を意味する。行政的な役職名でもあるが、ここでの村長の行為が「大きな人」という形容にまさに合致していることを身をもって実感したのである。つまり、プー・ヤイ・バーンとは単なる制度的な役職名に止まらず、こうした現場でのミクロな行為の過程を経て、村長が「大きな人」として再認識され、「大きな人」に成って行くのだということを、あくまで感覚的ではあったがこの時実感したと言えるだろう。今改めて振り返ってみると、この経験によって、日常の相互行為が社会の秩序とどのように関係しているのかという素朴な問いが生まれることになったように思う。これが本書の背景にあるひとつのきっかけである。

その後、このきっかけをゼロポイントとして本書の視座が形成されていった。つまりそれは、タイ農村の集まりの場において人々が日常的に繰り返る相互行為に焦点を当て、そうした相互行為の積み重ねが社会関係や社会の秩序を生みだしていくミクロな過程を具体的な民族誌記述として描き出していくという視座であり、これが本書で言うところの秩序のミクロロジーとなるのである。

本書では相互行為の細部を社会秩序との関係の中で焦点化し、タイ農村という経験の場の民族誌として記述するところに特徴があると言える。いわば、本書は相互行為のミクロな分析を試みることで、ミクロ的事実の中に映しだされてくる社会秩序というマクロ的世界の精髓を把握しようとする試みでもある。あえて一言で別言すれば、「秩序は細部に宿る」と言い換えることもできるだろうか。

日常生活における経験の場はその細部が数限りなく広がっているが、本書では主に3つの場所に焦点を当てている。第3章から第5章にいたる3つの章では、社会やその秩序に光を当てる上で欠くことのできない宗教儀礼以外の3つの場を取りあげ、そこにおける相互行為を微細に描きだしている。宗教儀礼をここで除いたのは先行研究で儀礼と秩序との関係が既に論じられており、本書ではそれ以外の場に議論を拓けようとしたためである。

3つの場所とは、第1に、調査村において度々行われた各種の研修や会議、訓練、国王誕生日の式典などの場（第3章）、第2は、タイの農村生活で最も多くの時間が費やされる農業労働の場、つまり労働や仕事が集約される場（第4章）、第3は、調査期間中に行われた地方首長選挙の運動の場、つまり政治の場（第5章）である。本書では、主に上記の3つの場所における些細な行為の断片に光を当て、過ぎ去る一瞬の累積が秩序へと成っていく過程を具体的な記述として捉えようとしたのである。

最後に、本書の調査執筆過程では今後に向けての新たな課題の萌芽も見いだし得たことを指摘しておきたい。特に、近年のタイはタクシン元首相を軸とする政治的な対立やデモなど、度重なる混乱と変動のなかに置かれているが、こうした状況に関して本書では十分に取りあげることができなかった。

しかし、近年の混乱に関するタイ社会の研究が、主に統計や制度論を中心とする政治経済的な分析から究明されている一方で、現地に暮らす人びとが具体的にいかに互いに行い、混乱や変動をどのように生きているのかという視角の研究は十分ではないと思われる。すなわち、マクロな鳥瞰図的な視点に加えて、相互行為を通じていかなる社会関係や秩序が生みだされていくのかというミクロな視点からもタイ社会を究明することは、変化へと向かうタイ社会を捉える上で喫緊の課題でもある。もちろん制度論も重要であるが、人びとがそうした制度を具体的な顔の見える関係性のなかでいかに生きているのかを、フィールドワークにもとづいて記述していくことは、近年の混乱や変動を根幹から考える重要な鍵となるだろう。

この点は本書の延長線上に今後に残された課題にもつながっていく。相互行為の過程という細部に分析の足場を置き、その行為の過程が混乱と変動の局面にあるタイの社会秩序といかに関係するのかという問いへ向かって、倦むことなくさらに厚く記述し探求し続けること、これが今後に残された課題であると言えるだろう。

(たかぎりょう・神奈川大学経営学部准教授)